「明星」初期と薊

尾崎左永子

創刊当初は新聞形式をとっていた「明星」は、明治三十三年九月十二日発行の第六号に至って、はじめて四六倍判の堂々たる雑誌の形式となった。本文六八ページ、他にピンクの広告ページがその前後に計八ページつけられている。広告第一ページは「鉄幹歌話・付録小扇記」で、内容は八月に初めて西下した鉄幹の講演、歌話を中心に、晶子、登美子を含む仲間たちが連日歌会・吟行会を行った記録を収採するものであったらしい。らしいというのは、この本は結局出版されず、部分的に「十二星遊記」（斉藤渓舟）「浜寺の記」（中山島庵）などが、他の雑誌に載っただけで終ったからである。

ところで、この広告は、アザミ（薊）の絵の枠で飾られている。墨描きで、おそらく長原止水の筆かと思われるが、このアザミという素材が、たいそう新鮮に見える。

次の「明星」にはすぐに反響がのった。

「明星表紙画先づ我意を得て面白く、成美君の才筆敬服の至りに候。素明君の田園二つながら妙、……増幹歌話広告のあざみの枠最も嬉しく候。（後略）――大阪　露石」

一條成美のアール＝ヌーボー風表紙、結城素明の挿画とともに、広告枠のデザインにまで、読者の眼は行き届いていたのである。

ところで、「明星」初期の歌に出てくる花の名を見ると、梅、萩、菊など、王朝和歌の題材を押しのけるようにして、薔薇、百合、苺、など西欧風の花がぐんぐんふえてくる。菫、芙蓉なども、従来の日本風な観点でなく、新鮮な、象徴詩風な目で西欧風に捉えられている。百合は本来日本原産の鉄砲百合がイースターリリーとしてヨーロッパで多用されたわけだが、古くからの山百合や姫百合の感覚ではなく、キリスト教的雰囲気で捉え直されているところに特色がある。

アザミも古来日本にあった花であるが、和歌の世界にはなじまない花とされていたのか、「古今集」以下の勅撰集では、素材として用いられている例に出遭うことがない。「万葉集」にも見えていない。これを新しい感覚で歌の素材としたのは、「明星」六号の与謝野鉄幹であったようだ。

わがやまひはげしくなりぬあざみぐさ口に吸う子を夢に見しより（六号）鉄幹

前後の関係からみると、この歌おそらく、血汐みななさけに燃ゆるわかき子に狂ひ

死ねよとたまふ御歌か（六号）晶子
病みませるうなじに細きかひなまきて熱
にかわける御口を吸はむ　同

に関わりがありそうである。明治三十三年夏の西下で、鉄幹は初めて晶子にあい、連日の歌会に同席している。帰京後鉄幹は高熱を発して月末まで病床にあり、実際に夢に見たことも考えられるが、むしろ毎日のように激しい恋文を送りつけてくる晶子のエネルギーに「アザミ」の野性と、棘のある花の魅力を感じたのかもしれない。この歌は晶子への返書にしたためられたと考え得る。これに対し、

おにあざみ摘みて前歯にかみくだきにくき
東の空ながめやる　（七号）　晶子

とあるのは、晶子の返歌であろう。「にくき東の空」は、自分をアザミにたとえたにくらしい鉄幹の住む東京の方角である。晶子の二十八首の大作のあとに、鉄幹が埋め草風に組んだ小活字の十一首があり、その中には、

おそろしき夜叉のすがたになるものかアザミくはへてふりかへる時（七号）鉄幹

という歌が見えている。当然、これは晶子への返しである。

アザミという、当時としてはかなり特殊な花を歌材として、ひとつのいきいきとした共有空間、共感の世界が、それもかなり閉鎖的な形で成立していることに注目したい。そこには鉄幹の、晶子に対する親愛がみられ、晶子は「にくらしい」といいながら、鉄幹に甘えている感じがある。鉄幹の歌には、晶子へのかるい揶揄が含まれており、お互いに安心して軽く戯れているような雰囲気が伝わってくる。これは、鉄幹と登美子のやりとりの中にはない種類の親近感である。鉄幹と登美子の間にはつねに緊張感があり、その歌の清潔感には、相手に一歩を置いた「ハレ」の感覚がある。しかし晶子とのやりとりには「ケ」の味わいがあり、晶子の直進的な恋心をいなしているような余裕が感じられる。

鉄幹が何からヒントを受けてアザミをとり上げたかは不明だが、当時アルフォンス＝ミュシャ（サラ＝ベルナールのポスターで名高いアール・ヌーボーの巨匠）のデザインをほとんど丸写ししていた「明星」を考えると、ミュシャのデザインからの連想ということもあり得よう。ミュシャの絵柄にはアザミと見られる花の描かれたものが実在するからである。

後年、晶子は「スバル」の時代（明治四十三年）に「花」という選集を出している。スバル同人江南文三との共著で、花の小事典になっており、巻末に晶子が五十首の花の歌をのせているのだが、その第一首目に次の歌が置かれている。

きぬぎぬや撫子よりも美しきあざみの花に
白き露おく

とくに特色のある歌ではないが、「明星」初期のアザミの歌のやりとりを頭に置いて読むと興味深い。「撫子」と「あざみ」はこの場合暗喩的に女の姿を表わしているようにもみえ、「露」は男と女の朝の別れの涙を意味しているようにもみえて、若いころの晶子自身の姿を重ねたくなってしまうのである。

ちなみに、アザミは、古くは『出雲風土記』にも現れ、『延喜式』では栽培して春の若菜とし、漬菜にもしたことが知られる。ただ、歌の素材とならなかったのは前述の通りである。薔薇や百合に並んでアザミが短歌に登場してきたときには、アザミの花はすでに詩的な感覚に適う花として、新しい性格を付与されはじめていたということができよう。